

北海道の特別養護老人ホームにおける生活空間と快適性について : その1 平面型と空間の特性

著者	泉田 菜穂
雑誌名	人間福祉研究
巻	10
ページ	183-197
発行年	2007
URL	http://id.nii.ac.jp/1136/00000357/

北海道の特別養護老人ホームにおける生活空間と快適性について — その1 平面型と空間の特性 —

泉 田 菜 穂*

1. 研究の背景と目的

特別養護老人ホーム（以下、特養と記す）は、1963年に施行された老人福祉法に基づいて設置され、北海道には現在273施設ある。高齢者の在宅以外の居住形態は、グループホーム、老人保健施設^(注1)、等多数ある。近年は特に団塊の世代の一斉退職や、核家族化で子供が独立し今まで住んでいた住宅に一人で住むことが困難になる等を背景に、老人保健施設やグループホームが増加している。また、費用の安い施設に入居希望が集中する為、特養に入居を希望しているが老人保健施設等で待機している高齢者も少なくない。

しかし現在も特養には全国に約38万人、道内には約1万8千人が居住している^(注2)。日常の介護を必要とする高齢者の生活の場として特養の重要性は今もなお大きい。

また、高齢者が「集まって住もう」形態は今後も様々な形で展開されることが予測される。そのため、ここでは高齢者の集まりの生活を考える上で制度成立以来、長い年月を経ている特養を対象とした。

これまでに、特養の居住環境や建築計画に関する数多くの既往研究^(注3)がなされている。いずれも単一あるいは数例の施設を対象

に、生活の場としての居住者の快適性について分析した研究が多い。タイプの異なる多数の施設を1つの同じ切り口から比較しようとした研究は少ない。

これらの背景をふまえ本研究では、北海道における特養を対象に「生活の場」としての施設空間のあり方について調査・検討・考察する。その上で、たとえば「アットホームな空間」、「落ち着きとやすらぎ」など居住者にとっての快適性についての提案を試みたい。

研究の目的は、特養など高齢者のための生活施設が居住者にとって、より快適であり家庭生活の延長として無理なくすごせる空間であるためには、どのような要素が求められているのかを分析し「生活の質の向上」のための評価基準作成に資することである。

2. 研究の方法

特養の平面型と空間の特性を見るために、道内の各地を対象に空間構成調査を行った。調査資料を平面の特性ごとにいくつかの種類に分類し分けて、空間種別ごとに、さらにいくつかの環境要素ごとに分析・検討・考察する。

3. 調査の概要

居住者が現在、どのような空間で生活を営

*浅井学園大学大学院人間福祉学研究科

キーワード：生活の質、快適な環境、居住者、公室空間、私室空間

んでいるかを把握する為に、また平面型や配置の違いに着目し、さらに居住者の快適性を向上させるための効果的な工夫や配慮を見出すことを目的に調査を行った。

資料数は、54施設である。主たる調査項目は、①各私室空間の位置 ②公室空間の種類、位置 ③管理空間の種類、位置、公室空間や私室空間との関係 ④建物と屋外空間とのかかわりである。

建物の平面型は、規模、敷地条件、経済条件、地域性などによって個々に異なる。調査対象施設の築年数は、1966年から2005年と広範囲に渡るが施設計画の違いを見る上で有用と考える。その理由は、①地域に偏ることなく傾向を見るため ②古い年代から最新の施設計画の違いを見るため、などである。

4. 平面型と空間特性

調査資料の分析・検討結果から本論では、「ワンウェイ型」、「回廊型」、「センターコア型」、「ユニットケア型」の4つに空間型を区分し整理する(図1)。比較・検討の方法を明確にするため、また評価するために調査施設を3つのゾーンごとに、さらに、3つの環境要素ごとに整理する。

4-1 諸室の用途別、空間種別による検討

施設内の諸室は用途の上から「公室空間」、「私室空間」、「管理空間」の3つのゾーンに分けられる。それぞれに求められる機能は異なり快適性の評価基準も異なる。その一方で、3つのゾーンはたがいに関連しあい、機能的、立体的に結ばれている必要がある(図2)。

3つのゾーンそれぞれについて考察しなが

ら、これらの関連性にも着目する。

4-2 環境による検討

空間構成を比較、検討し評価するために次の3つに視点をおく。

まず初めに、平面概要等を記す。建築計画に視点を置き建築全体の間取り、各室の大きさや使い勝手、等について見る。私室空間では居住人数から見た大きさや配置、公室空間では使い勝手やフレキシビリティ、管理空間では、スタッフの作業やケアサービスの上で合理的な配置になっているかなどについて見る。

①「基本環境」は、採光や通風条件などを見る。採光は、1日3回の食事の場であり居住者の生活の中心となっている食堂に着目する。

通風条件は、風が吹き抜けることのできる開口部が二面以上あるものと、一面しかないものにわけて評価する。

②「動線」は、居住者の日常的な移動に視点を置き、介護者については合理的で働きやすい作業動線になっているかを確認する。介護者の日常の様々な動線の中から、介護者室から物品室への動線に着目する。サービスの上で合理的な搬出入が可能か否かを見る。

③「屋外とのかかわり」は、屋内外の連続性に視点を置き、居住者が庭のみどりに親しめる工夫がされているかを見る。庭やテラス、バルコニーの有無を見る。さらに、平面型から居住者が親しみやすい庭を計画できるかを見る。居住者が親しみやすい庭の条件は、建物による「囲まれた庭」とする。建物がL字、コの字、口の字型であり、その内側に設けられ囲まれ感のある庭は、建物内外の

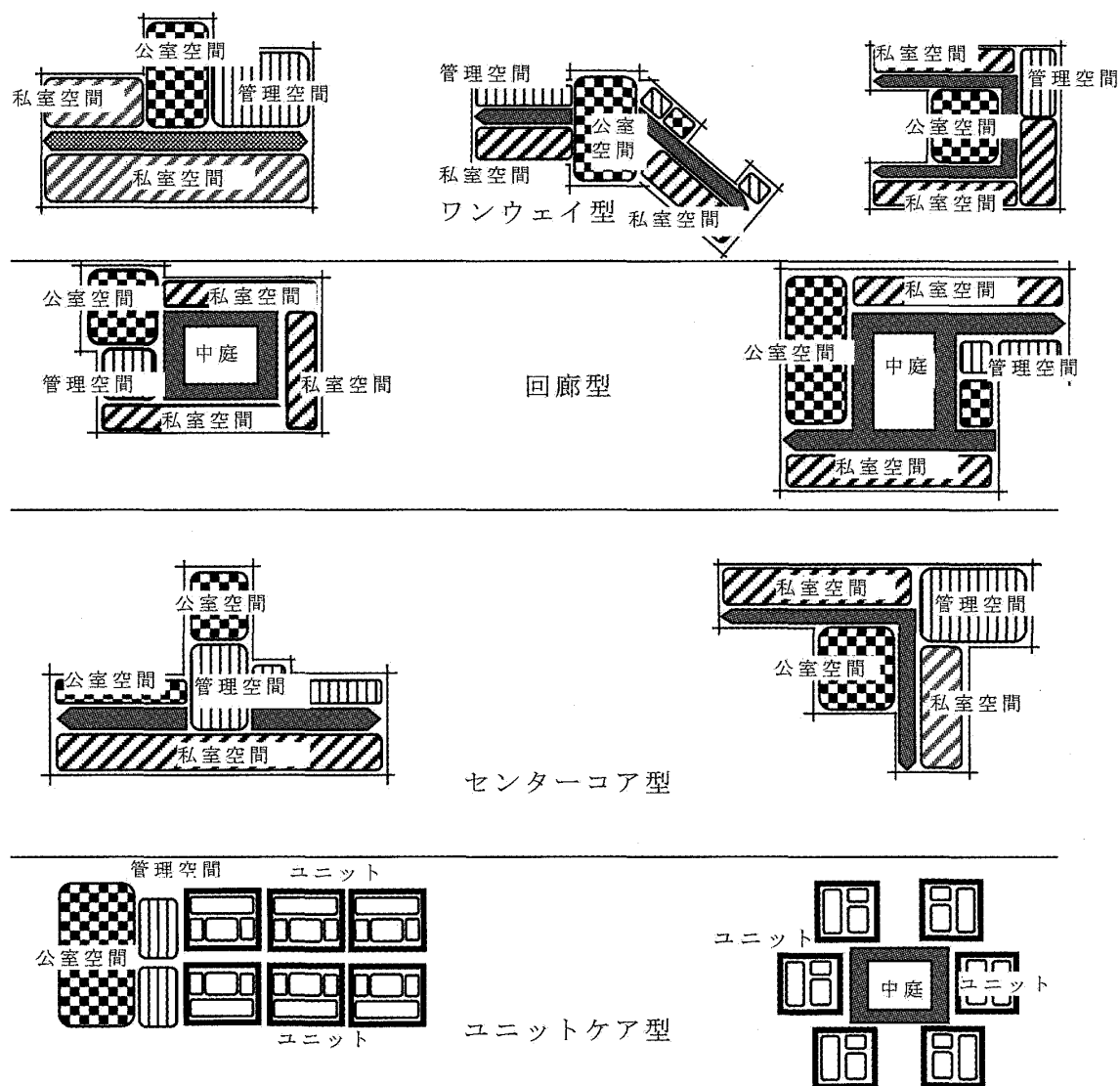


図1 4つの空間型

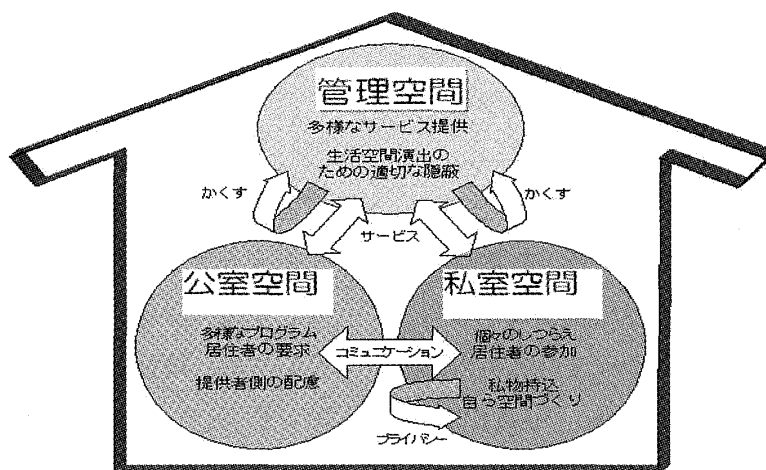


図2 3つのゾーンの関係

連続性が高く安全性も高いと考えた。

4-3 考 察

特養は共同生活の場である。その規模は、一施設あたりの平均居住人数が67.99人と比較的大きい(注4)。そのため、空間構成は一般家庭と大きく異なる。例えば、長大な廊下に同じ仕様の居室が連続して並ぶ、玄関、トイレ、食堂までの動線が長い。食堂やホールが広大で家庭的な落ち着きが得られにくいなど生活環境として違和感が生じることも考えられる。

以下、「ワンウェイ型」、「回廊型」、「センターコア型」、「ユニットケア型」の4つの型ごとに考察する。

また、「公室空間」、「私室空間」、「管理空間」の3つのゾーンごとに、空間構成を比較、検討し評価するために3つの環境による視点に着目し検討・考察する。

4-3-1 ワンウェイ型

ワンウェイ型の特徴は、一本の廊下に諸室が連続して並んでいる事である。

該当数は22と約半数を占め最も多い。廊下の形状はいくつかのパターンに分けられる。それぞれの内訳を見ると「直線型」は13施設、「コの字型」は3施設、「T字型やL字型」は5施設、と直線型の施設が目立つ。

該当数の半数以上は二階以上の階数を持つ中層型である。これは10施設とほとんどが道央圏である。他の地域に比べ敷地面積が限られ、建物をコンパクトに集約する必要性が理由と考えられる。中層型の場合、一階はデイサービス等に使用、二以上の階には私室が配置されているケースが多い。私室の日照や通

風への配慮が理由と考えられる。

空間別に特徴をまとめ、さらに環境による視点ごとに考察する。

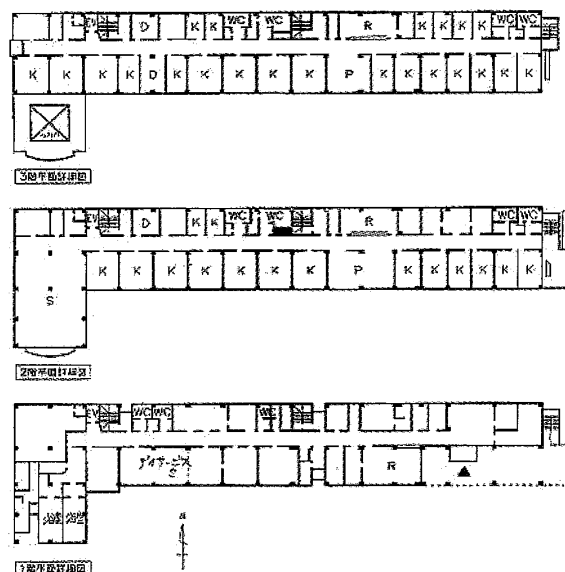


図3 ワンウェイ型の事例

(1) 公室空間

ワンウェイ型の平面概要は、公室空間を端部や中央部に配置し大きな空間を確保しやすい。公室空間を端部に設けている、あるいは中央部の他に端部に設けている事例は10施設と約半数を占める。公室を端部に配置することによって、躯体のスパン割りに制約を受けることなく自由な平面形を実現できる。

公室を中央部に設けている事例は、19施設とほとんど全てである。私室からの動線短縮を計ることと、管理のしやすさが理由と考えられる。特徴的な事例を見ると、「L字型」では、廊下の接点に、食堂、デイルーム、機能回復訓練室を集約させている。また、一階部分が変形「T字型」では、ホール兼機能回復訓練室を3本の廊下の交点に設けることによって広大な空間を

確保している。

①基本環境

端部に大空間として確保された公室空間は、室の3方向に開口部を設けることで良好な採光と通風を得られやすい(図3)。

一方、敷地いっぱい建てられた事例では、食堂にトップライトを設け採光を確保している。また、南面あるいは二面以上の採光を確保している事例は、22施設中10施設と約半数である。二方向からの光で、明るい食堂を保持している。

次に通風条件を見る。食堂の通風が二面以上確保されている事例は22施設中6施設と少ない。この内5施設の食堂は、端部に配置されている。良好な通風条件を得るために食堂は、ワンウェイ型では端部に配置することが良いと考えられる。

②動線

居住者の視点で食堂から私室までの動線距離を見る。食堂の中央から一番遠い居室の距離は22施設全てが20mを超える。

次に、食堂からトイレの動線距離を見る。20mを超える事例は、11施設、10m未満の事例は8施設である。食堂とトイレの距離は施設によって大きく異なる。食堂が「集まりの場」となっている施設では、食堂の付近にトイレを設置している傾向が伺われる。一方、デイルームなど食堂以外の集まりの場がある場合、食堂とトイレを近くに配置しようとする計画的配慮は少ない。

③屋外とのかかわり

4施設は、公室や廊下から出られるテラスやバルコニーを設け、内外を連続させている事例である。しかし敷地に余裕がない

場合、中庭をつくりづらいワンウェイ型では、庭やテラスなどの余裕空間がとれないこともある。

(2) 私室空間

私室の平面概要は、単純な為合理的ではあるが殺風景になりやすい。具体的には単純で同じ居室が並ぶため、画一的で自室を見分けにくいなどの欠点が指摘できる。

これは、直線型において顕著であるが、それ以外の形状でも廊下からの景観は単調になりやすい。

①基本環境

資料は全て廊下の両側に室がある中廊下型である。廊下の片側だけに室のある片廊下型は無かった。片廊下型は、風通しの面で有利であるが、廊下が長くなりすぎる事が理由と考えられる。中廊下型は居室の採光条件に格差ができる欠点があるが、事例のうち4施設は、私室を廊下の南面、公室や管理関係の室を北側に配置して採光を確保しようと工夫している。しかし、中廊下型のもう1つの欠点である風通しの悪さへの配慮は平面計画の上からは見られない。

一方、廊下の両側に私室を配置した事例を見る。北向きで冬期間の採光が期待できない私室が存在する事例は、5施設である。また、採光条件をそろえるため私室を東西面に配置し南面を十分に生かしきれていない事例もあった。

②動線

動線は中廊下を挟んで、私室と公室や管理室がコンパクトに集約されているため、管理しやすく合理的になっている事例が多い。しかし「コの字型平面」配置や「串型

平面」配置では、廊下が長大になるため公室空間と私室空間の動線距離が長くなりやすい欠点が指摘できる。

各居室からトイレへの動線を見る。各施設において、トイレから最も遠い居室の距離を見る。20mを超える事例は22施設中11施設と半数をしめる。また、10mを超え20m以下の事例も9施設と多い。長大な廊下の端部、あるいは、中央部のみにトイレが配置されていることが原因である。管理上や建築コストの問題はあるが、ワンウェイ型においてトイレは、各室または2室に1箇所ごとに計画することが望ましいといえる。

③屋外とのかかわり

私室にバルコニーを設け、内外を連続させている事例であった。直線型は敷地条件が良好であれば私室の窓の外に建物が無い為、大きな掃き出し窓を設けてもプライバシーを保ちやすい利点がある。一方で「L字型平面」では、窓越しに視線が交差する私室が存在している。私室のプライバシー確保の点から一層の工夫が求められよう。

(3) 管理空間

中廊下の南面に私室を配置し、北面に管理室を配置した直線型では、リネン室等を分散配置でき、作業動線の短縮が計られている。また、管理部門の区分を明確にできる利点がある。ほとんどの事例で北面に管理空間を配置している。

4-3-2 回廊型

廊下が建物を一周し、ループした型である。該当数は12である。中庭が設けられるこ

とがもっとも大きな特徴である。中庭を設けていない事例は2施設と少ない。

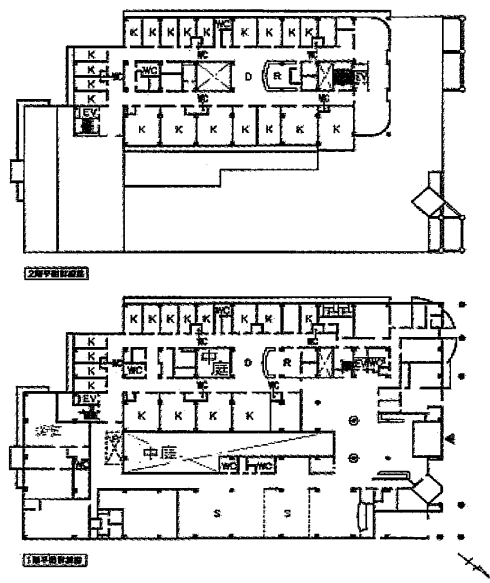


図4 回廊型の事例

(1) 公室空間

公室の平面概要は、平面形が口の字に閉じているため大空間はとりづらい。そのため回廊から枝状に廊下を設け活動室などを外に張りだしている配置がすべての事例で見られる。このため、平面形は単純な長方形とならず凹凸度は多い。さらに、中庭側にも壁面を設けなければならない為、建設コストが割高である。

①基本環境

中庭が二以上ある事例が4施設ある。その内3施設は玄関から廊下を通じて中庭を見渡すことができる(図4)。大空間を生かした開放的なエントランスが計画できよう。またデザインの手法によって、居住者に愛着と誇りを持たせる豪華さの演出も期待できる。

食堂の採光条件を見る。南面あるいは、二面以上の採光を確保している事例は6施

設である。この内3施設は、中庭やトップライトの光を取り入れている事例である。中庭の有効利用のひとつとして注目できる。

次に食堂の通風条件を見る。食堂の通風が二面以上確保されている事例は、12施設中3施設と少ない。回廊型の平面型を有効に活用し、中庭面から外周面への通風を実現できる計画上の工夫が求められよう。

②動線

1施設は、中庭に面する4面がすべて廊下である。その特色をいかして、ループ部4角に特別に設けられた空間が見られる。

廊下がループしているので周回型の散歩が可能である。冬季間でも雪を気にせず歩行することができる。

食堂から私室の動線を見る。食堂の中央から一番遠い私室の距離は、すべての施設で20m以上であった。回廊型の長い廊下であるため、食堂までの動線が長くなっている。食堂を一箇所ではなく分散配置するなど工夫が必要である。

③屋外とのかかわり

中庭に直接出られるドアがある施設は、8施設と大半をしめる。建物内外の連続性の高さがうかがえる。回廊型の中庭は建物で囲まれ、さらに外部から閉じられている為安全性が高い。屋内との連続性の高い庭を計画できることが、回廊型の特徴のひとつといえる。

(2) 私室空間

私室は外周側に設けられている事例が半数ある。私室のプライバシー確保が理由と考えられる。

①基本環境

中庭に私室の窓を向けることによって南面採光としている事例は少数である。アトリウムからも採光が得られる事例があった。私室はそれぞれ東西面に向いているが、廊下を通してアトリウムからの採光を取り入れる工夫がなされている。二面採光とすることで明るく、均一な光環境が実現されている。

②動線

各私室からトイレへの動線を見る。各施設において、トイレから最も遠い私室の距離を見る。20mを超える事例は5施設、10m未満の事例が5施設と二分される結果である。10m未満の事例は、いずれも2室に1箇所または各室ごとにトイレが配置されている。回廊型のループした廊下は、長大になりやすい。私室ごとに多数のトイレを配置、分散配置しないと動線が長くなることがわかる。

③屋外とのかかわり

中庭があるため屋内外の連続性が高い。片廊下型とした場合、採光や通風が良好で、植栽などを見ることができる快適な居住環境を実現できる。

(3) 管理空間

廊下が長くなりやすい型では、管理室や備品庫の位置によって、管理者の動線が長大になるおそれがある。リネン室と私室が離れている事例がある。浴室が分散されているなど作業動線が長くなっている。一方、寮母室の前にデイルームを配置している、中央部に介護室を配置している事例が見られた。居住者の管理をし易くするため

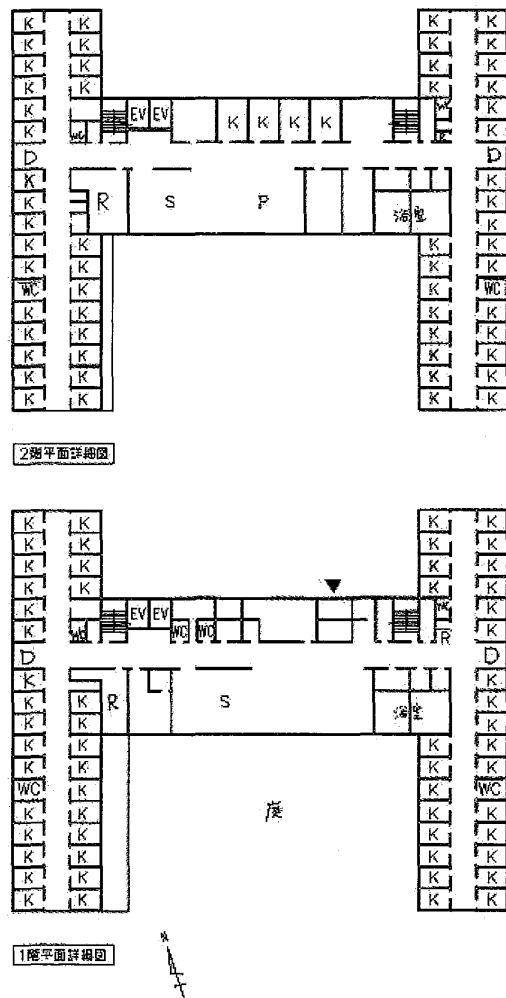


図5 センターコア型の事例

の工夫が見られる。回廊型の欠点を少なくし、管理側の動線を短くしようとする工夫が見られる。

4-3-3 センターコア型

管理空間を中心として各室を配置した型である。該当数は11である。平面型は、T字型やH型が多い。以下に特徴を述べる。

(1) 公室空間

平面概要は、風呂や食堂などの公室空間が管理空間と隣接しているため、管理しやすい。また、管理空間の近くに、食堂、デ

イルーム、機能回復訓練室を集中して配置しコアとしている平面型が多い(図5)。さらに、デイサービス部分を別区画としてまとめ、コアから連結させている事例もある。

大空間を作りやすいため食堂や活動室を一体に計画し、フレキシブルに使用している事例が9施設見られる。食堂から廊下をはさんで、展示室や日常動作訓練室にして壁面を設けず大空間を実現している事例がある。また1階は食堂と地域交流スペースとし、2階は食堂と機能回復訓練室としている事例もある。2フロアとも壁を設けていないので、また、同じ時間に両方の部屋を使用しないので部屋を大きく見せる効果が期待できる。

①基本環境

食堂の採光条件を見る。南面あるいは、二面以上の採光を確保している事例は、11施設中7施設と過半数を超える。TやHなどのジョイント部分を上手にいかして、食堂の採光を確保している。

食堂の通風条件を見る。食堂の通風が二面以上確保されている事例は、11施設中6施設である。採光条件、通風条件ともに、環境の良い型といえよう。

②動線

私室と公室の動線が長くなりやすいことは先に指摘したが、機能回復訓練室がセンターコアから離れ、南西端部に配置されている事例があった。このため機能回復訓練室へは公室からも私室からも遠い。建築計画上の欠点と指摘することもできるが、訓練室までの歩行も運動と考えれば、巧みな配置ととらえることもできよう。

食堂からトイレへの動線を見る。20mを超える事例が11施設中5施設をしめる。また、食堂から私室への動線は、すべての施設で20mを超えている。

③屋外とのかかわり

5施設は大きな公室空間にテラスを設け、屋外活動に配慮している。回廊型の様に囲われた中庭ではない為、安全性に欠ける点があるが屋内外を連続させようとの配慮が見られる。

次に、平面型から屋内との連続性の高い庭を計画しやすいかを見る。ワンウェイ型と比較して、複雑な平面型をもつセンターコア型は、11施設中9施設と囲まれ感をもった庭を取りやすい平面型になっている。

(2) 私室空間

私室の平面概要は、コアから建物端部に向かって配置されている事例が多い。私室と公室は明確にゾーニングされていて、わかりやすい平面型が実現されている。

①基本環境

事例11施設中8施設が、T字型平面の軸を東西にしている。全ての私室を工夫して南面採光を実現させている。公室か管理部分を集約化できるセンターコア型は私室の採光条件を整える上で有利な型といえる。

②動線

建物端部に配置された私室は、公室空間から距離が離れ、有機的に連結されないなど、私室の居住性に差が生じる欠点がある。2施設は、中央部に食堂と機能回復訓練室が設けられているが、H型平面の為、廊下が長く端部の私室から公室までの

動線距離が長い。また、食堂、ダイニング、機能回復訓練室の全てを併用し中央部で寮母室の横に配置されている事例もあった。その為、管理面では利点だが、両端の私室の居住者は、公室までの動線が長くなっている。

次に、私室からトイレまでの動線距離を見る。10mを超え20m未満の事例が11施設中6施設と半数をしめる。センターコア型の特徴として、TやH型の平面形が多い。その為、中央部と端部にトイレを配置している事例がある。ワンウェイ型や回廊型と比べて、私室からトイレの動線は、比較的短くなっているといえる。

③屋外とのかかわり

公室や管理室をT字型の直交する棟に集め、私室向きを美しい眺望が得られる方位にそろえている事例がある。事例では、全私室から「津軽海峡が一望できる」と謳い、美しい景観を施設の特徴としている。居住者に、施設への愛着とステータスを持ってもらう手法のひとつとして注目されよう。

(3) 管理空間

公室と管理室がまとまっている為、基本的に管理者が居住者を管理しやすい利点がある。そのため管理上の問題点は少ないと考えられる。特に公室と管理室の集中度が高い「T字型平面」は、5施設と半数をしめる。これらの施設中央部には寮母室と食堂か機能回復訓練室のいずれかが配置されている。寮母室にいても、公室での居住者の位置が確認できる利点がある。

寮母室の近くに物品庫が配置されているの

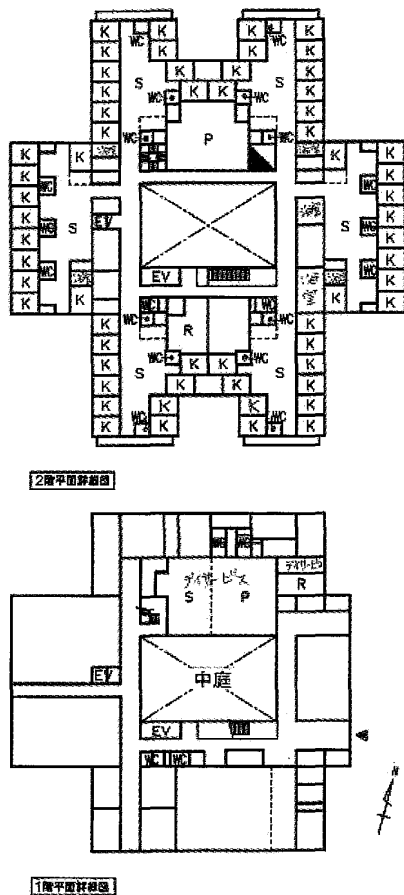


図6 ユニットケア型（新築タイプ）の事例

は2施設である。介護者の動線を短くするための工夫といえよう。一方物品庫が端部に配置されている事例もある。介護者の動線が長くなると考えられるが、居住者と物品の搬入を明確に区分できる上で長所ととらえることができる。この5施設すべてに、物品庫の付近に搬入出できるドアが設けられている。

また3施設では、寮母室の隣に医務室を配置している。介護員と医療スタッフとの連携を計る上で有利な配置といえよう。

4-3-4 ユニットケア型

約10人を1つのグループと考え、家族的に生活する型である。該当数は9と各型のうち

最も少ない。「ユニットケア」は本来ケアサービスの一手法であり、「ワンウェイ型」や「回廊型」など建物の平面型を示すものではない。また、ユニットケアを前提として新築した施設（以下、新築タイプ）ばかりではない。従来の建物を改造してサービスをユニットケアにした施設（以下、改造タイプ）も見られる。空間構成について一様に比較することは無理がある。しかし、新しい「介護のかたち」として注目されており、今後の施設のあり方を研究するには重要な型といえる。以上のことから本論では、ユニットケアを空間区分のひとつととらえ「ユニットケア型」として考察する。

「ユニットケア型・新築タイプ」の特徴は、私室の他、居間、キッチン、風呂、トイレがまとめて配置されていることである。居住者は、ユニット内で生活のすべてを行うことができる。また、介護者はユニット内できめ細かな介護が可能で、動線は短く合理的である。ユニット内の集まりの場所は、一般住宅の「居間」の役割をはたし、家族的な生活環境が実現している。

一方、「ユニットケア型・改造タイプ」では、ユニット内にすべての機能を設備することは困難であり、完全なユニットケアを実現することはできない。また、ユニットケアの考え方が新しく、施設の計画手法が十分に確立されているとはいえない。

ここでは、新築タイプ（4施設）と改造タイプ（5施設）を2つに分けて検討・考察する。

(1) 新築タイプ

新築タイプの事例は、4施設である。建

築年は2002年から2005年といずれも新しい施設である。

平面概要は、1ユニットに、居間、私室、キッチン、トイレがまとめられている。事例ではさらに、浴室がユニットごとに設けられている（図6）。改造タイプとは違い私室は各ユニット居間を中心として配置されており廊下はない。居間を中心とした私室配置の利点は、今までの家庭生活に近い施設生活が実現できる点である。また、居住者、介護者共にユニット内で共同生活することが出来るため、親密なコミュニケーションが可能である。また、動線が短く合理的な上にきめ細やかなケアができる型といえる。

各ユニットはひとまとめにモジュール化され、連結されている。連結の仕方は様々である。3施設は公室や管理室を中心に、ユニットがはりだすように配置されている。他の1施設は、中庭を囲んで廊下があり、その周りにユニットを配置している回廊型である。いずれの型も、ユニットの独立性を高めることが優先されている。そのため、建物の凹凸度が高く外壁量が多い。建築コストは断熱やユニット化の上からも高くなりやすい平面型といえる。

①基本環境

私室は、居間を囲むように配置されている為、全私室同じ採光は取りづらい。さらに、向かいあわせやL字部分の私室同士がある場合は、視線の交差が発生する。

ユニット内の集まりの場は、それぞれ方位が異なる。そのため、同一の施設であっても採光や通風の条件はユニットごとに差が生じている。

②動線

各ユニット内で生活の全てを行える為、集まりの場は、家庭の居間と同じ程度の広さで機能的であり家庭的なくつろぎが期待できる。

③屋外とのかかわり

平面型から屋内との連続性の高い庭を計画しやすいかどうかを見る。機能回復訓練室と管理部門を取り囲むように枝上にユニットが配置されている事例が見られた。ユニット同士の間にL字やコの字ができ、庭が計画し易い。

また、中庭を取り囲むように、ユニットが配置されている事例では、中庭への出入り口も設置されており、内外の連続性が高いといえる。

管理空間について見る。

2施設は、ユニット内に介護職員室を配置していない。管理空間はユニットの外に配置されている。したがって事務用のファイル、ロッカー、介護機器など生活感を損なう物品が居住者の目につくことは無い。「家庭的雰囲気」により近づける為の配慮が平面図から読み取れる。

(2) 改造型タイプ

改造タイプの事例は、5施設である。建築年は一番古くて1970年である。ユニットケアに取り組みはじめたのは、いずれの施設もここ数年である。

平面概要は、向かい合わせや隣同士の私室の何室かをグループにしている。したがってユニット内には、居間、トイレ、風呂などが無い。これが、改造型タイプの大

きな限界である。

2 施設は、中庭つきの回廊型である。そのため、両施設には、中庭には面するものの北面向きの私室が存在する。それぞれ、7ユニットである。

また1施設は、直線型で4ユニットである。別の1施設は、直線型2階建てで、各フロア2ユニットの全4ユニットで出来ている。

さらに別の1施設は、L字型平面が2つつながっている型である。私室の採光をできるだけ確保しようと工夫している。そのため私室同士の視線が交差する。ユニット数は6である。

既存タイプは、建築年数が経過している為に、6人部屋という施設もある。新築タイプは、完全個室が実現されているのに対し、既存タイプでは、未だ複数人部屋が存在する。

①基本環境

食堂の採光条件を見る。食堂を端部に配置している事例が2施設見られた。その為、二面以上の採光が得られている。また、通風条件においても同様である。

②動線

改造タイプは、既存の型に分類すると、ワンウェイ型が3施設、回廊型が2施設である。したがって、食堂から私室への動線を見ると、5施設全てにおいて20m以上となっている。

③屋外とのかかわり

平面型から見て屋内との連続性の高い庭を計画し易いかどうかを見る。回廊型の平面を有する2施設において、コの字で囲われた居住者が親しみやすい庭が確保されて

いる。

管理空間について見る。

食堂やデイルームなど、居住者が集まる場所の隣に、介護者室を設けている事例がある。居住者を監視しやすい配置となっている。また、介護者室の中に物品庫を設けている。介護者の動線が短縮できている工夫事例である。

5. ま と め

施設の空間について、居住者が快適に生活する為にはどのような要素が求められているか比較・検討した結果を4つの平面型ごとに公室空間、私室空間に区分してまとめる。

5-1 ワンウェイ型

公室空間

- ①公室を端部に配置することによって自由な平面形を実現できる。さらに、トップライトや二面以上の開口部を確保することで、良好な採光条件や通風条件も期待できる。
- ②平面型が直線である事が多いワンウェイ型では、屋内から屋外へ連続したコの字型などの囲まれた庭を計画しにくい傾向が見られた。

私室空間

- ①平面型が直線であるワンウェイ型は、私室が単純で同じように並ぶため、居室が画一的で殺風景になりやすい。その為居住者は、自室を容易に見つけることができない。
- ②私室は、全室南面採光を確保している事例が多い。しかし、全ての事例は中廊下

の為通風への環境配慮は見られない。

- ③各私室からトイレへの動線が、長大な事例が半数あった。トイレの配置計画の工夫が必要である。

5-2 回廊型

公室空間

- ①平面型が口の字に閉じている為、大きな空間は取ることが難しい。また平面形は、凹凸になる傾向がある。
- ②口の字に閉じている回廊型の中庭は、屋内外の連続性があり安全性も高い。
- ③廊下がループしているので、周回型の散歩が可能である。冬季間でも雪を気にせずに、室内を安全に歩行できる。

私室空間

- ①回廊型では、私室を外周側に設けている事例が多い。その理由として、居室からの視界が開けているまたは、視線がぶつからないことやプライバシーの確保があげられる。
- ②回廊型のループした廊下は、長大になりやすい。各私室からの公室やトイレなどへの動線計画は居住者の移動をスムーズに行う為に重要である。

5-3 センターコア型

公室空間

- ①管理室を中央に配置しその隣に食堂などの公室空間を配置して、居住者を管理し易くしている。また平面の中央部は、大空間を計画しやすい利点もある。
- ②TやH字型など凸凹な平面型をもつセンターコア型は、ワンウェイ型に比べて囲まれ感のもった庭を計画し易いといえ

る。

私室空間

- ①私室は、中心となるコアから建物の端部に向かって配置されている事例が多い。さらに、T字型平面の場合は、全私室を南面に向けることが可能である。
- ②建物端部に配置された私室は、公室空間から離れ、有機的に私室が連結されていない欠点が指摘できる。

5-4 ユニットケア型

公室空間

- ①新築タイプでは、1ユニット内に、居間、私室、キッチン、トイレ、（一部浴室）がある。居住者は、ユニット内ですべての生活を行うことができる。また、介護者の動線も短く合理的といえる。
- ②改造タイプでは、向かい合わせや隣同士の私室の何室かをグループにしたかたちが多い。その為、ユニット内には、キッチンやトイレなどは存在しない。

私室空間

- ①新築タイプでは、ユニット内で居間を囲むように私室が配置されている。その為、全室同じ採光を取ることができない。また、全私室の個室化が実現している。
- ②改造タイプでは、多人数の居室が多い。最も多くて6人室があり、6人室を3室として1ユニット18人としている施設もあった。

以上、空間の型それぞれに特徴があり、利点と欠点を持っていることを明らかにした。居住者が快適に生活する為には、どの型が望ましいか一概に言い切れない。生活施設とし

での快適さを大切にしながら、施設の規模、敷地条件、居住者の特性、経済性など、様々な要因を総合して計画されるべきであろう。

ここでは、「屋外とのかかわり」、「公室におけるトップライトと吹き抜け」、「私室のプライバシー」、「良好な採光と通風」、「動線と周回型の散歩」、「トイレの配置計画」などが、居住者が、高齢者居住施設においてより快適に過ごす為の評価基準に資する要素になることがわかった。

謝辞：

北海道内の特養の施設の関係者さまには、調査にあたりご協力頂きました。ここに記して感謝申し上げます。

なお本論文は、著者修士論文の一部を加筆修正したものである。

注：

- 1) 老人保健法による施設である。
- 2) 厚生労働省調査（2005年10月1日現在）による。
- 3) 参考文献1)～8)による。
- 4) 特養の一施設あたりの平均居住人数を表す。2003年厚生労働白書「施設の種別施設数と定員の年次推移」によりと居住者は376,328人である。それを施設数5,535で割った数値を用いる。

参考文献：

- 1) 小川信子他：「特別養護老人ホームにおける設計計画に関する研究」、『北海道女子大学人間福祉学研究集』第3号，2000，pp 49～62
- 2) 橋弘志他：「特別養護老人ホーム入居者

の施設空間に展開する生活行動の場—個室型特別養護老人ホームの空間構成に関する研究 その1—」、『日本建築学会計画系論文集』第512号，1998，pp 115～122

- 3) 橋弘志他：「特別養護老人ホーム入居者の個人的領域形成と施設空間構成—個室型特別養護老人ホームの空間構成に関する研究 その2—」、『日本建築学会計画系論文集』第523号，1999，pp 163～169

- 4) 橋弘志他：「個室型特別養護老人ホームにおける個室内の個人的領域形成に関する研究」、『日本建築学会計画系論文集』第500号，1997，pp 133～138

- 5) 井上由起子他：「高齢者居住施設における入居者の個人的領域形成に関する考察—住まいとしての特別養護老人ホームのあり方に関する研究その1—」、『日本建築学会計画系論文集』第501号，1997，pp 109～115

- 6) 橋弘志：「特別養護老人ホーム共用空間におけるセミプライベート・セミパブリック領域の再考—個室型特別養護老人ホームの空間構成に関する研究 その4—」、『日本建築学会計画系論文集』第557号，2002，pp 157～164

- 7) 神吉優美他：「高齢者居住施設における個室・ユニット化の意義および問題点—個室・ユニット型養護老人ホームへの建替え事例を通じて—」、『日本建築学会計画系論文集』第588号，2005，pp 47～54

- 8) 齋藤芳徳他：「高齢者の生活環境と住環境の評価に関する考察」、『日本建築学会計画系論文集』，2000，pp 59～66

“Living Spaces and Comfort of Nursing Homes in Hokkaido”

Naho IZUMIDA

ABSTRACT

The purpose of this study is to find out how the living spaces in the facilities should be for residents, lead to a comfortable life and improve their quality of life. I carried out survey of space organization, and I clarified the characteristics of space organization for each type.

Conclusion is summarized below.

Lighting and ventilation environment are very important.

Accessible to outdoors.

A variety of activities during winter are very important.

Secure privacy around the bed.

Key words : Quality of life, Comfortable environment, Residents, Public spaces, Private spaces